

米国 稼働率は緩やかな上昇(06年3月鉱工業生産)

発表日：06年4月14日（金）

～製造業の堅調持続～

第一生命経済研究所 経済調査部

桂畑 誠治(かつらはた せいじ)

(03-5221-5001 : sei.ji@dlri.dai-ichi-life.co.jp)

鉱工業生産 (Industrial Production and Capacity Utilization)

鉱工業生産		製造業 (NAICS)							設備稼働率	生産能力
		製造業 (NAICS)	鉱業	公益	ハイテク 関連	除ハイテク 関連	自動車関連		製造業 (NAICS)	
05/03	▲0.0 (+4.0)	▲0.4	▲0.5	+3.0	+0.0	▲0.3	▲3.2	+79.9	+78.1	+0.1
05/04	▲0.1 (+3.1)	+0.0	+0.1	▲1.6	+1.7	▲0.1	▲1.7	+79.7	+78.0	+0.1
05/05	+0.2 (+2.4)	+0.4	▲0.7	▲0.2	+1.9	+0.3	+0.8	+79.8	+78.1	+0.1
05/06	+0.8 (+3.7)	+0.4	+0.9	+5.2	+1.0	+0.2	+2.4	+80.3	+78.2	+0.1
05/07	▲0.0 (+3.1)	+0.2	▲1.0	▲0.1	+2.2	+0.1	▲2.0	+80.2	+78.2	+0.1
05/08	+0.3 (+3.1)	+0.4	▲0.6	+0.3	+3.0	+0.2	+3.6	+80.3	+78.4	+0.1
05/09	▲1.3 (+2.0)	▲0.5	▲9.0	▲0.3	+1.6	▲0.5	+2.8	+79.1	+77.8	+0.1
05/10	+1.1 (+2.4)	+1.8	▲1.3	▲2.0	+1.0	+1.9	▲0.0	+79.9	+79.1	+0.1
05/11	+0.9 (+3.2)	+0.8	+4.5	▲1.0	+3.7	+0.4	▲4.6	+80.5	+79.6	+0.1
05/12	+1.0 (+3.5)	+0.4	+2.6	+4.2	+1.6	+0.4	▲1.3	+81.1	+79.7	+0.1
06/01	▲0.4 (+2.9)	+0.8	+1.7	▲11.6	▲0.3	+0.7	+2.6	+80.7	+80.2	+0.2
06/02	+0.5 (+3.0)	▲0.1	▲0.7	+8.0	+1.0	▲0.2	▲1.1	+81.0	+79.9	+0.2
06/03	+0.6 (+3.6)	+0.5	+0.9	+0.5	+2.7	+0.5	+1.5	+81.3	+80.1	+0.2

(出所) FRB

(注) 数字は前月比、但しカッコ内は前年同月比。

鉱工業生産は前月比 +0.6%と市場予想を 上回った

06年3月の鉱工業生産は前月比+0.6%とプラス幅が拡大し、市場予想の同+0.5%を上回った。製造業、鉱業が増加に転じた。しかし、12、1、2月合計で0.3%ポイント下方改定されており予想対比弱い内容といえよう。3ヵ月移動平均・3ヵ月前対比年率では+4.5%と2月の+7.7%から鈍化している。

製造業は、自動車生産の拡大などにより前月比+0.5%と増加に転じた。3ヵ月移動平均・3ヵ月前対比年率でも+5.8%（2月+8.3%）と高い伸びを維持しており、製造業は堅調さを維持していると判断される。

製造業稼働率は 80.1%と再び80% 台を回復

3月の稼働率は、生産能力が前月比+0.2%と拡大した一方、生産が同+0.6%となったため81.3%と市場予想を下回った（2月は81.0%に下方改定）。他方、製造業の稼働率は80.1%と2月から0.2ポイント上昇し、再び80%台を回復した。

製造業生産は19業 種中11業種の拡大 にとどまった

業種別では、鉱業は前月比+0.9%とプラスに転じた。公益は、暖冬によって天然ガスが同+3.5%に鈍化し、電力が同▲0.1%と減少に転じたため、全体でも同+0.5%と減速した。

製造業は、前月比+0.5%と拡大に転じた。拡大した業種数が19業種中11業種と2月の8業種からは増加した。セクター別にみると、自動車関連の生産は、自動車部品が前月比+2.2%、完成車が同+1.7%となったため、同+1.5%と2ヵ月ぶりの拡大となった。新型車の発売効果もあり米ビッグスリーの米国内での販売が増加したため、生産が

拡大した。また、堅調が持続しているハイテク関連は、通信機器が減速したものの、コンピューターが前月とほぼ同率、半導体が大幅に加速したことにより同+2.7%（2月同+1.0%）と拡大ペースが速まった。基調を示す3ヵ月移動平均・3ヵ月前対比年率でも3月に+15.2%（2月同+19.7%）と高い伸びを維持しており好調が持続している。

2006年4～6月期も 製造業生産の堅調が 見込まれる

今後の動向では、個人消費は2006年1～3月期にはクリスマス商戦後のクリアランスセールやクリスマスプレゼントで受け取ったギフトカードによる年末年始の販売増加、暖冬効果によって、前期比年率+5%程度への加速が見込まれる。4～6月期には雇用・所得の増加が続くなか、住宅部門からの資金調達の拡大ペース鈍化や、ガソリン価格の上昇等により同+3%の安定的な拡大ペースになると見込まれる。

住宅投資は暖冬効果で1～3月期には押し上げられ、堅調さを維持するものの、4～6月期には金利上昇の影響で縮小すると予想される。

設備投資は、堅調なペースでの成長持続によって期待収益率が高い水準を維持するものと、①コスト削減圧力の強まりによる効率化投資需要の高まり、②稼働率の上昇、③オフィスビル空室率の低下、④コンピューターの更新投資、⑤規制緩和に伴う通信業での光ファイバー投資計画の増加等によって投資需要は強い。また、資金調達面では、①業績の拡大持続や雇用創出法の2005年末の失効を前にした海外利益の資金還流促進によるキャッシュフローの拡大効果の残存、②株価の上昇、③信用スプレッドの縮小等投資を行い易い環境にある。設備投資は堅調さを維持するとみられる。

このような最終需要のもと、1～3月期の在庫投資の拡大ペースが鈍化しているとみられ、4～6月期には在庫の拡大ペースが加速すると予想される。輸出は、海外景気の拡大ペース加速によって10～12月期以降増加ペースが速まろう。

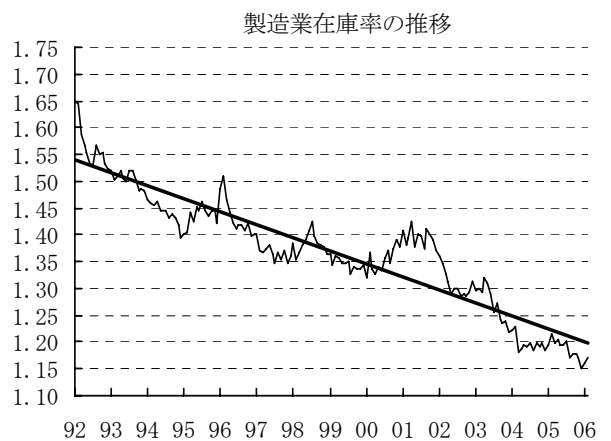
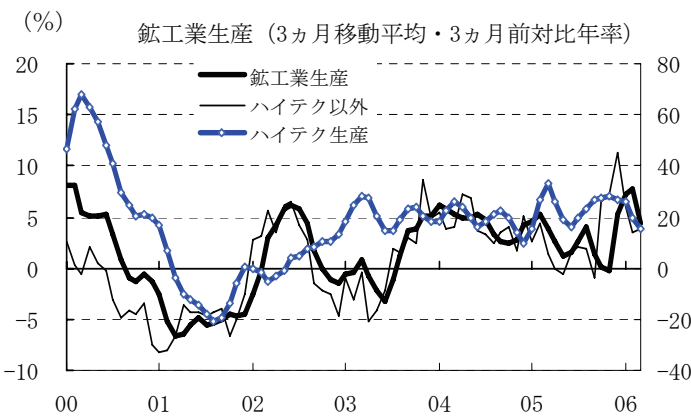
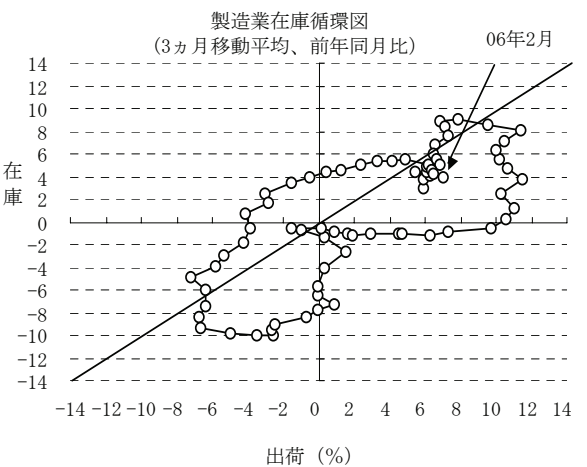
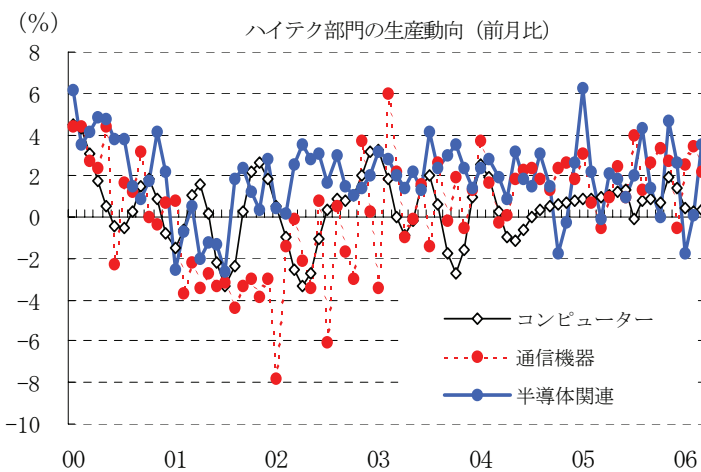
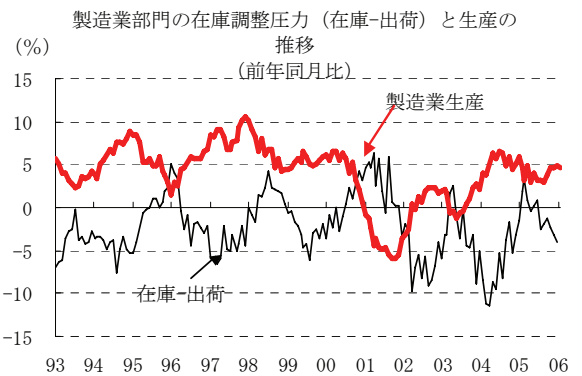
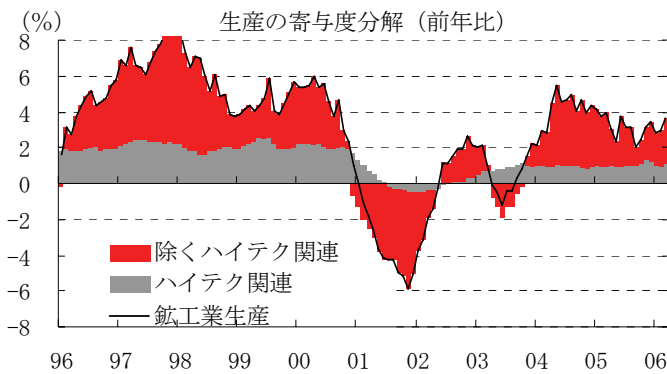
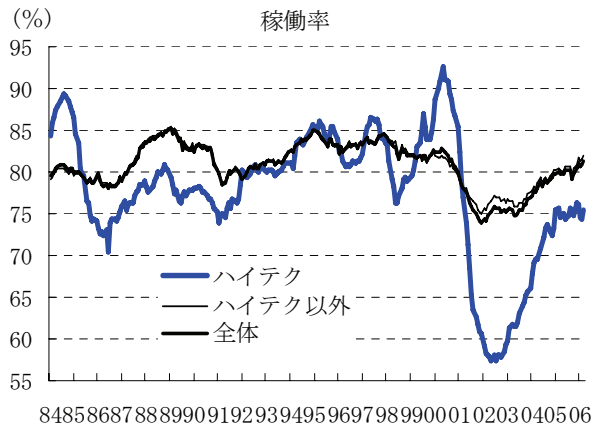
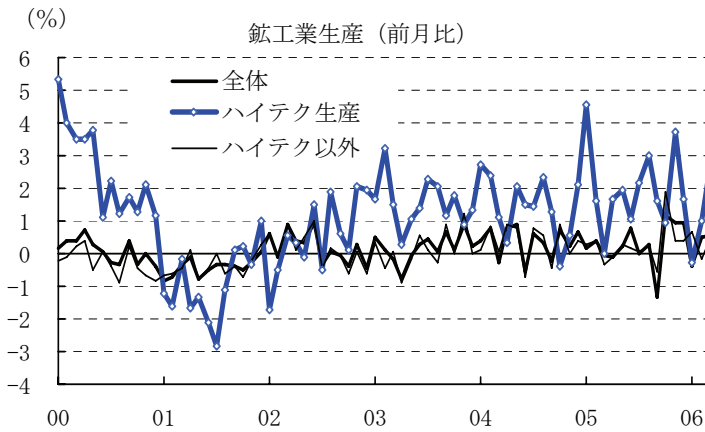
以上のことから、4～6月期の生産も堅調さを維持すると予想される。一方、足下で稼働率の上昇が続いていることや、景気・売上・企業収益に対する経営者の楽観的な見方が強まっていることから、増産投資の拡大ペースは加速しており、今後生産能力の拡大ペースが速まろう。このため、稼働率は緩やかな上昇が続くと見込まれる。

2006年前半利上げ継続

上記のように、2006年1～3月期には前期からのゲタと暖冬等の一時的な特殊要因によって前期比年率+5%程度の高成長が予想され、余剰設備や余剰労働力は縮小傾向を辿るとみられる。加えて、利上げ局面にもかかわらず長期金利が歴史的な低水準にとどまっていることから、利上げ効果を減殺している。このため、物価が安定しているなかでも利上げを継続しなければ景気が過熱しインフレ圧力を高めるリスクがある。

今後も、長期金利はFFレートを小幅上回る程度で推移する可能性があり、潜在成長率とみられる3%台前半まで成長ペースを鈍化させるためにも、5月10日のFOMCでFFレートは5.00%に引き上げられると予想される。その後、6月28日、29日のFOMCまでには景気減速を示唆する経済指標が発表される可能性が高く、政策金利は据え置かれ様子見に転じる公算が大きい。

ただし、長期金利の低位安定、ガソリン価格等エネルギー価格の下落、日本・欧州経済の予想を上回る成長等によって、成長率が押し上げられる場合には5.25%への利上げの可能性もある。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。